

人間の自由とくはかりごと

渋谷治美

動物学的に見て人間の特質は、直立二足歩行、大脳化、高度な社会生活、の三つにある。人間はこれらのうち前二者の賜物として、「目的定立実現活動」「自己実現」と名付けられるような特有な思惟・行動パターンを身につけてきた。わたしたちはこの振る舞い方を「人間の自由」と定義しよう。それは次のようなプロセスからなる。

① まず、予め自ら目的を定立する。 ② ついで、予め自ら手段・条件を整える。 ③ そののち②の手段・条件に則って①の目的の実現を目指して自ら実行する。(④ その結果目的の実現に成功すればそれでよし、反対に失敗したとき②に戻って手段・条件を整え直すか、①に戻って目的そのものを修正するか、あるいは全体を断念するかする。) この活動の主体は個人であってもよいし集団であってもよい。このプロセスを固有の日本語でいい表わしたものが、「くわだて」ないし「はかりごと」に他ならない。

まず「企てる」という言葉について簡単に考察してみよう。国語辞典によれば「企てる」は「鋤を立てる」から来たことが確かなようである(『日本国語大辞典』小学館)。春になって農民たちが今日から農作業を開始するという日に、冬の間荒れたままに放置されていた畑ないし田圃に最初の一鋤を入れる儀式を施し、それを「くわだて」と呼んだのであろう。この儀式の時点で人々は当然、秋の収穫を目的として想定していたはずである(①)。また、そこに至るまでのさまざまな中間的な作業・手立てをも頭に思い浮べていたに違いない(②)。つまり、上記のプロセスの①②を踏まえたうえで、③の実行の第一歩が「鋤を立てる」だったのである。

さて、大和言葉にはこの「くわだてる」とほぼ同義の動詞として「はかる」がある。次にこの言葉について検討してみよう。

ここに興味深い事実がある。漢和辞典によれば「はかる」と読むことのできる漢字が(今のところ確認している数でいえば)175個も存在するのである(『大漢和辞典』大修館書店、『広漢和辞典』大修館書店、他)。では「はかる」とはどういうことを意味するのであろうか。わたしたちは次の三つの角度から吟味を加えたい。1. 具

人間の自由と〈はかりごと〉(渋谷)

体的にどういう意味の漢字が「はかる」と読まれているか。2. これらの漢字に多く見られる扁から考えて何か特徴的なことがいえないか。3. そこには何が含まれていないか(どういう種類の漢字群が欠落しているか)。以下これらを順次吟味していこう。

1. 計、測、図、量、謀、諮、秤の七つの漢字が「はかる」ないし「はかり」と読まれることは、現在でも高等学校までの国語教育によって教わる。残りの漢字を見ると、ワープロの第二水準にすら入っていない漢字が全体の45%近くを占めていること(75文字)も目につくが、他方、日頃使い慣れた漢字が多く「はかる」と読まれていたことも判る。代表的なところを拾ってみると、概念の「概」、疑うの「疑」、商売の「商」、百姓一揆の「揆」、議論の「議」と「論」、経営の「経」と「営」、占領の「占」、住宅の「宅」、材料の「材」、研究の「究」、国家権力の「国」と「権」、名称の「称」、財テクの「財」、訪問の「訪」、裁判の「裁」、稽古の「稽」、課題の「課」、意欲の「意」、爵位の「爵」、講義の「講」、等である。確かに「商」いは典型的な「はかりごと」であるし、百姓が止むに止まれず「揆」を執行するとき、それは決死の「はかりごと」であったであろう。また織田信長やレーニンが英知と実力を傾けて「国」家「権」力を奪取しようとする目論みと行動は(成功・失敗に拘らず)最大級の「はかりごと」である。

2. 次に、扁を検討しよう。扁で最も目立つものは<言扁>である。これだけで31個あり、全体の約二割弱を占める。この割合の大きさが偶然の結果ということはいえぬ。また<手扁>が13個、<扌(心)扁>が10個、<木扁>が10個見られる。つまりこれら四つの扁だけで全体の四割弱を占めるわけである。

では「はかる」と<言扁>の関係はどうであろうか。人類の自由の最初のステップは予め目的を頭のなかで考えるということであるが、思考という作業は言語なしには成立しない。この事情を<言扁>の多さは反映しているのではないだろうか。このことと傍の意味を合わせて考えてみると、例えば「謀」の字は、傍の「某」が英語の something を意味することから明らかなように、何事かを(予め)考える、の意である。

では<手扁>はどうであろうか。まず手は人間にとって最も役に立つ道具・最初の「手」段である。これは直立二足歩行から直接的にもたらされた恩恵の一つである。しかし「はかりごと」と手の関係はこれにとどまらない。つまり人間が手を使って何事かをなすときは、すでに自由の第三ステップ即ち狭義の実践そのものに入っていることを意味することが多いであろう。つまり<手扁>と「自己実現」とは②の道具の使用のところで③の実行の段階とで二重に関係しているといえよう。

次に、〈忖(心) 扁〉が「はかる」と読まれる漢字一覧のなかに多く見いだされる理由は自明であろう。即ちこれは〈言扁〉と同様、最初に目的を「心」のなかに思い浮べることに関係する。

最後に〈木扁〉であるが、「自己実現」の第二ステップは、予め手段・条件を整える、であった。われわれには最も未開な文明を石器文明と呼ぶ習慣があるが、しかし人類が身体以外に最初に身近な道具として「手」にしたものは木であったと、確信をもっていうことができる。つまり、大和人が「はかる」とも読むことにした漢字のなかに〈木扁〉が多いのは、人間の目的的行為にとって当初長い間木(棒)が主要な道具となってくれたという事情の反映であるといえよう。

3. 第三の検討課題は「はかる」と読まれる漢字群に何が含まれていないか、であった。すぐ気づくことは、そこには人間にも備わっている本能的行動や、直接的な感情・情念の吐露といったものに関係する漢字は一つも見当らないことである。例えば「あくびをする」とか性に関する直接的行動、また怒りや悲しみに関する事柄は皆無である。それは、これらが予め目的を立て手段を整えてから実行するような行為ではないからであろう。このことは1.で確認したこと、即ち総じて人間の目的的行為を表す漢字が「はかる」と読まれるということの傍証として、重要な意義を持つと思われる。

以上で「はかる」の基本的な検討を終えよう。ところで、人間の第三の特質である社会性についてはまだ検討されていない。では「はかる」と社会性は関係がないであろうか。

今日の話は「企てる」という言葉の検討から始まったが、この漢字はまた日本語として「たくらむ」とも読むことができる。「たくらむ」の語源は「他」+「昏む」と考えることができる。「昏む」は暗くするの意である。ずばり意味を斟酌すれば、他者の判断力(物事を「はかる」こと)を眩ますこと、ということである。他者性とは社会性である。人間の社会関係はすべて「企て」ならざるものはないが、ということはそれらはまた「企み」の絡み合いなのではないか。

面白いことに「はかる」のほうにもこれと似たような事情がある。数ある「はかる」と読む漢字のなかでも、ニュアンスからして「謀」の字こそ「企み」と一致する。ところで謀の字は「はかる」と読むのとは別に、「たばかる」とも読む。国語辞典によれば、この大和言葉は「他」+「はかる」からなるという(『日本国語大辞典』小学館)。ここに「はかりごと」の有する他者性とその性格が伏在していたわけである。

以上「企て」と「企み」、「はかる」と「たばかる」の二つの関係の平行性を、

「た」＝「他」という接頭辞の共通性を媒介として確認した。しかしこれは別に、人間の本性をことさらに性悪説的に邪悪なものとして描こうとしてのことではない。例えば気の合った二人の友人がぼったりオフィス街で出会って、昼飯を一緒に食べることにしたとする。このときA氏は今日は鰻重でも食べようかと思っていたのに対して、B氏は懐具合からしてラーメンで済まそうと思っていたとする。この矛盾はしかし通常の場合一瞬の機微によって解消する。A「どこにする？」B「あそこのラーメン・ショップは結構旨いよ。」A「じゃあ、そこにいってみるか。」これでおしまいである。----- このときB氏はA氏を「企んだ」ないし「たばかり」のである。なぜならB氏は本当の事情（あまり金を持っていない）を打ち明けずに別の言葉（近くて旨い）で誘ったからである。これは一つの小さなほほえましい「たばかり」の例であるが、日常の大多数の人間関係はこの種の平和共存型の「企み」関係「同床異夢」の関係によって成り立っているのではなかろうか。男女二人の夫婦生活がその最たるものといえよう。

では人類史の上では「企み」「たばかり」はいつごろから登場したのであろうか。当然、人類の登場とともに、というのが正解なのであろうが、それを支持する有力な資料が各種の神話である。その代表としてここで『旧約聖書』の冒頭の書『創世記』を見てみよう。そこにはアブラハムの巧みな「計」略が描かれている。

アブラハムの一族はパレスチナの地を遊牧していたが、飢饉に襲われたので一時エジプトに渡ることにした。そのとき、彼の妻サライが美しかったので、エジプト人が夫の彼を殺し彼女を奪うことを恐れて、彼女を妹であると詐った（兄なら殺されないで済む）。すると彼女はエジプトの王（パロ）の後宮に加えられ王に可愛がられた。神（ヤーヴェ）は事情を何も知ることのなかったパロの方を厳しく罰し、「兄」アブラハムには妻の操と引き替えに命と莫大な財産を得させた。----- これは第一に、俗にいう「ひも（女術）」の始まりであるとともに、第二に、人類史上最初の二枚舌（half-lie）の行使である（サラは実際アブラハムの異母妹ということであるから、彼女が「妹」というのは半分は真実）。しかし第三に、このアブラハムの「目的定立実現活動」は「他を晦まし」「他を謀る」行為の、最初の輝かしい成功例といえよう。

すでに明らかなように、「企む」「たばかり」とは「騙す」ことにほかならない。そこでわれわれは、この言葉についても簡単に吟味を加えてみたい。「騙す」はく馬扁>+「扁」からなる。「扁」には片方に偏るの意がある。昔あるとき北方の匈奴がアクロバットの戦術を編みだし、漢民族に対してまんまと勝利を収めたことがあったという。それは、兵士が裸馬の片側の腹にへばりついて相手に姿が見えないように

して敵陣に突撃するというものである（相手からは空馬が驚進してくるとしか見えない）。この戦術から「騙」の漢字が成立したという。これは漢民族からすると、敵に「騙」された苦い失敗を表意文字にして忘れないようにしたということである。

ところで「騙」の字は「騙す」以外に「騙^{かた}る」とも訓読みする（詐欺師のことを「カタリ」という）。そして大和言葉では「かたる」はそのまま「語る」である。つまり人類において大脳化によって言語能力が発達したことは、一つには意識的な目的的行動を可能にしたのだが、他方それは人間に「騙す」能力が身に備わったことを意味したのだ。大和人はその事情をく語る＝騙る>と訓読みすることによって、忠実に言語に写しとったわけである。ドストエフスキーに次のような台詞がある。

「というのは、生きるということと嘘をつくということは同義語ですからね」
（『ボボーク』河出文庫『ロシア怪談集』p.237）。

これまで「くわだてる」「はかる」という大和言葉の検討から始まって、言語と人間の目的的行為には「騙す」という性格が先天的に備わっているという事情を見てきた。この性格はそのまま人間の自由の本質でもあろう。では「騙す」相手は誰か、という問題を最後に再検討してみたい。それは、人間は社会関係のなかで他者を「騙し」ながら自己実現を「図って」いるつもりでいながら、実は「騙したつもりが騙されている」のではないだろうか、という疑念が拭えないからである。

第一に、人間は互いに「語り」合い「騙り」合っているのであるから、人類全体としてみれば「騙し」「騙され」る関係はトントンになっているといえるだろう。また個々人の人生についても、長い目で見ればほぼ同様のことがいえるであろう。

しかし第二に、もう少し深刻な事情がある。人間の「自己実現」の営みは人間自身がそのつど目的を観念として定立するのであるが、その目的がその行為のプロセス全体の<意味>を意味する。しかし、そのように<意味>を目指して行為すること自体にはたして《意味》があるのだろうか。目的的行為即ち<意味>的思考に慣れきった人間は、その目的的行為を遂行すること自体にアプリオリに《意味》があると思ひ込むようになった上で、しかしそれが現実には容易に見当たらないため、神などの絶対者にその《意味》の拠り所を求めることになっただけなのではないだろうか。「歴史は必ず進歩する」という考えや「悪人は最後には滅びる」という道徳観も同然であろう。これらの観念によって人間は、<意味>の実現を目指して日々苦闘すること自体（人生）にあたかも究極的な《意味》があるかのように自己欺瞞に陥っているのではない

人間の自由とくはかりごと> (渋谷)

だろうか。人間は「はかりごと」の果てに自分自身によってそのように「はかられる」のである。これが人間を巡る究極的な「騙り」である。

「というのは、生きるということと嘘をつくということは同義語ですからね。」